

# 東国の渡来人

## — 5 世紀後半を中心として —

土生田 純之

### 1 渡来人存在認定の手続き

考古学による渡来人研究の第一人者である亀田修一は、かつて遺物・遺構・その他の項目ごとに考古資料を詳細に分析した。そして、朝鮮半島産や日本列島産半島系遺物の分類、渡来人の意識（自主的渡来か強制的渡来かなど）、渡来人の子孫を含めたその後等、各項目にわたって検討を行い、渡来人の存在やその様相の認定手続きを示唆した<sup>(1)</sup>。これは半島系遺物をはじめ、日本列島には本来存在しない考古資料が出土すれば、直ちに渡来人の存在を想定する傾向にあった当時の学界に対する牽制も含まれていたのではないと思われる。ただ、亀田の考察は微細な部分にまで踏み込んだ意欲的な論考であるがために、かえって証明が難しい部分が生じる結果となった部分をはじめ、現実の発掘調査結果と照合する場合の不明瞭及び難解な部分を残している。

これを受けて筆者も、渡来人認定の要件を次のように整理しているが、亀田の論考に比して、やや単純な整理を心掛けた。これは考古学による渡来人認定の思考方法や手続きは亀田の論考に尽くされているので、実際の遺跡に即して考察する場合、もう少し単純に考えることも重要であると思料した結果である。

さて、渡来人存在の可能性は遺物、遺構、儀礼の順に高くなるのであるが、単純に上記の順にその可能性が増すのではない。そこには様々な要因が絡んでおり、その逐一について丁寧に解析する必要がある。以下にこの分析視角について簡略にまとめておこう。

**遺物** 遺物は簡単に持ち運びできるものが多い。したがって渡来人が故地から当該地に持ち込むことが容易であるということも考えられるが、逆に幾人もの手を経ていわば駅伝式に持ち込まれることや、商品あるいはその容器として流入する場合も考えられる。特に金銅製の装身具（垂飾付耳飾、冠、飾履など）や一部の鉄製品など、威信財が出土すれば大いに注目されるが、むしろ威信財の場合は政治的動機による上位階層間の贈答品として、直接移住先（日本列島各地）で生活するに至った渡来人が介在しない場合も多い。それよりも威信財あるいは貴重品には本来ない土器（須恵器生産が開始される前の陶質土器のように、日本では入手困難な製品の場合を除く）などの日常品が、しかも同一遺構から多く出土すれば渡来人が存在した可能性が高くなる。もちろん既述したように貴重品（贈答品）の容器として持ち込まれた場合も考えられるため、

慎重な検討を要することは言うまでもない。ただし数量の多さとともに、古式の土器が製作技法は当然、胎土を含めて半島産（持ち込みによる将来品）であったものが、徐々に技法や形態が列島に普遍的なものに変化する過程が窺えるような事例は、渡来人およびその子孫が存在した可能性が著しく高くなる。また渡来人のその後について考察する際、きわめて重要な資料となろう。このように、遺物についてもその性格や出土状況を詳細に検討する必要がある。

**遺構** 遺構は持ち運びできないものであるため、一般論としては遺物よりも渡来人存在の可能性が高くなる。しかし、起源が朝鮮半島や中国にあったとしても、早く流入して定着したものについては当然ながら渡来人の存在を示唆するものとは限らない。むしろオンドル付住居のように、日本に普遍的には定着しなかったものが出土すれば、その可能性は高くなる。また百濟武寧王のモガリ所と想定されている韓国公州市艇止山遺跡<sup>(2)</sup>にみられるように、特殊な建築物の大壁建物（柱材を密に並べたうえでこれを壁の中に閉じ込めて外部からは見えないようにした建物。後世の土蔵に近い構造物）もこの類に入ろう。これらは在来倭人が広く受容しなかった施設であり、一般に普及しなかったことから、渡来人が持ち込んだものである可能性が高くなるのである。例えば朝鮮半島では一般的なオンドル住居を例にとると、継続的に造営されず一定の期間が過ぎると消滅するので、渡来人やその子孫もこうした装置を放棄したものと思われる。それゆえ、こうした遺構は渡来人存在の可能性を高く示唆するものとみてよいであろう。また造付竈のように本来日本になかった装置（日本ではもっぱら炉が用いられた）が後に定着する場合でも、極めて早い段階にしかも数多くが存在すれば、渡来人が実在した可能性が高くなる（関東の場合、造付竈が広く定着するのは6世紀前半以降であるが、後述するように一部の地域では5世紀中葉～後半に集落の大半がこれを備えた住居を営んでいる）。もちろん、遺構も日本列島への流入以後刻々と変化するものであり、型式変化を基礎とした詳細な分析を欠かすことは許されないのである。

**儀礼** 儀礼は思想に基づいた行為であるため、十分な理解を伴わない場合は急速な変化を余儀なくされる。今日に例えるなら、全くのお祭り騒ぎあるいは企業戦略と化したクリスマスやハロウィンをみればよくわかる。もちろん、儀礼の意義を理解して定着するものもある。したがって遺構の項で述べたように導入初期や定着過程の分析を欠かすことは許されないであろう。殺馬牛儀礼はついに定着しなかった例であり、黄泉国思想に基づく石室内への飲食器配置は定着した例である。前者の場合、5世紀から奈良時代に至る各時期、各地域において断続的に認められているが、各地域内にとどまった儀礼として孤立的であり決して普遍化することはなかった。また後者の場合は6世紀前半における畿内型石室の成立にともなって認められるようになるが（この段階における畿内型石室の構築は、おおむね上位層にとどまっている）、下位層を含めて広く広まるのはさらに遅れて6世紀中葉以降である。このように定着の有無によって渡来人存在の可能性は変化するが、定着したものであっても遺構の項で述べたように、ごく初期の場合は渡来人存在の可能性が高くなる。さらに定着の実態についても、政治的・社会的階層差によって様相を異にする場合があることに留意したい。

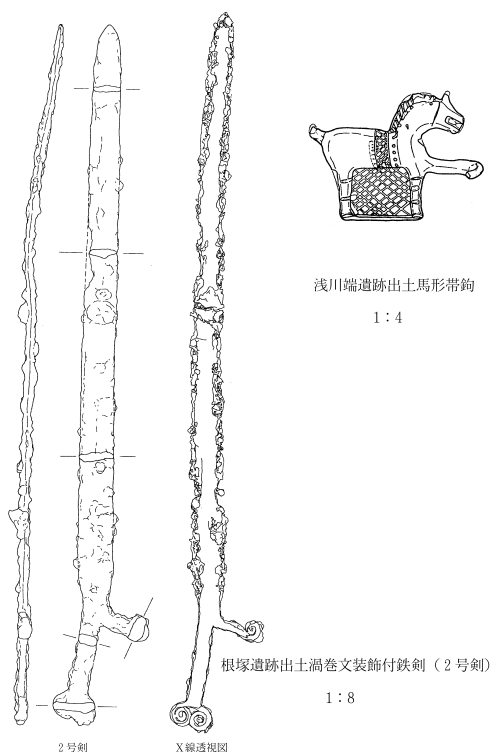
上記した中でも若干触れたように、渡来人の存否問題を語る際、単純に遺物、遺構、儀礼の順にその資料的価値が高くなるものではなく、歴史的展開の中で考察する必要がある。またこれら

の要素を分節してひとつひとつ丁寧に分析する必要があるが、その後全体を統合して一度考察することが望まれる。もちろんすべての要素が揃えば渡来人存在の可能性が高くなるだろう。

## 2 東国（北信）の渡来人

かつて東国は、古墳時代には渡来人の存在がきわめて少ない地方であると考えられてきた。朝鮮半島をはじめとする東アジア起源の渡来人や文物は、対馬・壱岐から北部九州に至り、そこから瀬戸内海を経てのちの畿内（畿内は律令時代の呼称であり、古墳時代にはいまだ存在しない名称である。しかし以下では大阪、奈良地方を指す仮称の用語として用いる）に集中すると考えられてきた。現在の学界もそうした傾向にあることは否定できないが、一方で早くから東国における渡来人の存在を主張した見解も披瀝されていた事実を忘れてはならない。このことについては後述するが、今日東国の古墳時代には渡来系文物が不断に流入していたことが判明している。その中でも渡来系文物の流入が顕著な時期は、都合三度認められている。まず弥生時代終末から古墳時代の初頭が目される。次に5世紀の後半であるが、これについては3において詳述したい。最後に6世紀後半から7世紀初頭である。これについても4で検討する。そこで以下では弥生時代終末から古墳時代の初頭に認められる渡来系文物流入の状況とその背景について一瞥しておく。

当該期においては顕著な渡来系文物の出土が目される。すなわち、長野県木島平村根塚遺跡（弥生時代終末）出土の渦巻文装飾付鉄剣<sup>(3)</sup>や長野市浅川端遺跡（古墳時代初頭？）出土の馬形帯鉤<sup>(4)</sup>があげられる（第1図）。前者は朝鮮半島東南部の金海地方、後者は同地から洛東江中流域にかけた地方に系譜の淵源を求めることができる。いずれも単一の遺跡から出土したものであり、類品が広範囲に広がる状況は全く認められない。しかし、内陸の信濃地方から発見されたことは、見逃すことができない重要な事実である。また前者は畿内をはじめ列島の他地域からは未発見であり、後者は他に吉備の榊山古墳（5世紀前半）の例が知られているだけである<sup>(5)</sup>。このほか、弥生時代後期の金属製釧の検討を加えた野澤誠一が重要な事実を提示している<sup>(6)</sup>。それによれば、東日本出土の金属製釧は円環もしくは螺旋の形状を呈し断面が扁平なものであり東日本のみから出土する。また長野では墓地からの出土が多いのに対し、関東や



第1図 根塚遺跡出土渦巻文装飾付鉄剣と浅川端遺跡出土馬形帯鉤

東海では小銅環（指輪）・破片など再加工品の頻度が高く（古墳時代中期初頭に及ぶ）、中部高地が本来的な使い方を示している。この釧と東日本出土鉄剣の分布はほぼ重なることなどから、箱清水式土器を持つ人々は日本海ルートを経て東日本に入る鉄素材の流通を掌握していたと想定したのである。こうした事実が示す状況から、弥生終末～古墳時代初頭にかけて信濃（北信）に渡来人が移住してきた可能性を否定することはできない。このことが北信における積石塚の成立過程にも重大な意義を有することと思われる。そこで以下では、北信における積石塚の概観とともにその性格について若干の考察を行っておきたい。

さて、長野市大室古墳群は列島最大の積石塚古墳群である（第2図）。総数約500基の内7割を積石塚が占めるが、これと密接な関係にある土石混合墳を含む場合、9割にもなる。この大室古墳群の被葬者として早くから高句麗系（あるいは百済系）渡来人を想定する見解が提示されてきた<sup>(7)</sup>のである。それは427年の平壤遷都以前の地、集安周辺には太王陵や將軍塚などの整備な基壇式積石塚が、また王族が高句麗と同族である百済の前期の都城、漢城にはやはり高句麗同様基壇式積石塚の石村洞古墳群が築造されていたからである。また9世紀と時代は降下するが、『新撰姓氏録』や『日本後紀』に当該地に高句麗系渡来人の子孫が存在する記載を見出せるからであった。しかし、これら高句麗や百済の積石塚は5世紀前半をもって封土墳にとってかわる。また大室のような円形ではなく、いずれも方墳であること、大室のように内部構造を地山上に直接構築する、つまり墳丘構築前あるいは同時に構築するのではなく、段築の上部に内部構造を構築する構造であることに注意したい。すなわち両者は積石塚であること以外、相当に様相が異なるのである。

しかし、その後須坂市の八丁鎧塚古墳（第3図）が4世紀末に遡上すること<sup>(8)</sup>や、百済古墳に通じる遺物（獸面帶金具一八丁鎧塚2号墳出土・類例は韓国公州市宋山里1・3号墳、同公州



第2図 大室古墳群





第3図 八丁鎧塚古墳群

市水村里Ⅱ-1号土坑墓出土品をはじめ、岡山県瀬戸内市牛文茶臼山古墳、奈良県高市町真弓鐘子塚古墳等から出土している。ただし、これら獣面帯金具出土古墳の築造年代は、八丁鎧塚古墳よりも相当に降下するものも含まれている）も出土していることが判明した。このうち宋山里古墳出土品は周縁に列点文が施されていること、また水村里Ⅱ-1号土坑墓出土品は基本的な文様あるいは形態を鑄造によって表出した後に細部を陽刻によって仕上げており、これらは八丁鎧塚古墳出土品と同巧であることが指摘されている<sup>(9)</sup>。また大室古墳群の築造開始は5世紀中葉以降下するが、その間にも少数ながら北信の地では積石塚が構築され続けていた。

ところで、百済の積石塚はソウル市石村洞古墳群（第4図）に認められるものと漢江上流域を中心に展開するいわゆる無基壇式（第5図）とに分類でき、前者とは異なり後者の外形は、隅丸方形や楕円形を含め明瞭な方形ではないことや、地山上に直接内部構造を構築することなどが特徴的である。したがって八丁鎧塚古墳の祖形とも考えられる形態であるが、近年では両者の差異を前者が百済漢城期（～475年、特に4世紀代を中心とする同期の前半があてられることが多い）、他を百済成立直前の原三国期とみて、地域差ではなく時代差とみなす論調が主となってきている。ただし、無基壇式がすべて原三国期に遡上するものとみてよいものであるのか、未だ確証を欠く。現状においては、これら墓制の中には百済成立後に築造されたものを含む可能性を完全に捨て去ることはできない。特に近年においては百済成立時期を従来の4世紀ではなく、夢村土城が築かれ始めたと考えられる、3世紀の半ばに遡上させる方向も認められる。そうであれば、上記二者の積石塚は併行して築造された期間が存在することも十分に考えられるのである。このような諸問題を内包する漢江流域の積石塚については、今後とも注意深く研究を進める必要がある。その際、北信における大室古墳群形成以前の積石塚については、石村洞古墳群（林永珍によって高句麗式と百済式に細分されている。前者は3号墳を代表とするもので、古墳内部まですべて石材で充填し主体部は石槨である。一方、後者は2・4号墳等で、内部には粘土を充填し外部のみ石材を用



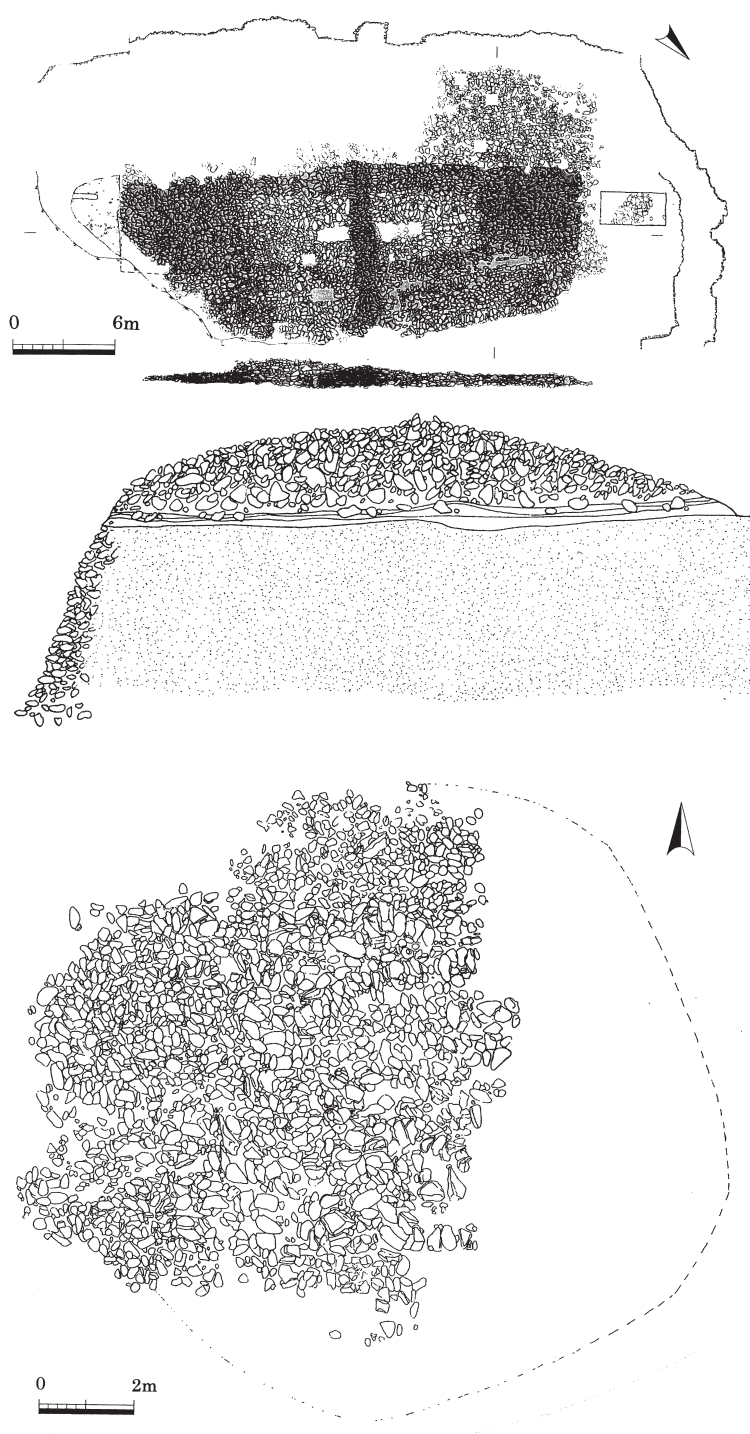
第4図(a) 石村洞3号墳(1979年)



第4図(b) 石村洞3号墳(整備後・1999年)

いる。また主体部は石村洞古墳群中に所在する土坑墓と同様の木棺を用いる類である)と無基壇式とを問わず、今後も比較検討を続けていくべきであろう<sup>(10)</sup>。

以上によって、北信の積石塚は高句麗および百済との関係で導入された可能性が再び浮かび上がってきたのである。既述した、弥生時代終末～古墳時代初頭における鉄素材流入ルートとの関係が想起されるのである。ただし、5世紀中葉に造営を開始する大室古墳群の場合、その構築数がそれまでとは異なりきわめて多数であることや、東日本の各地ではほぼ同時期に積石塚の造営が始まることも関連する可能性がある。つまり、八丁鎧塚以来の伝統の上に、新しく東日本の広域にわたって同時多発的に生じた積石塚古墳の造営開始については別途考察する必要がある。次



第5図 無基壇式積石塚（上・三串里積石塚、下・中島遺跡）

にこのことについて簡略に眺めてみよう。

### 3 5世紀後半における東国の渡来人

東国において積石塚古墳が構築されるのは、東三河、西遠江、北信、西毛、甲斐の諸地域である。このうち積石塚古墳の築造開始時期について未だその実態が不明の東三河と甲斐を除けば、間違いなくその初現は5世紀中葉～後半の中にある。ただし、西遠江と西毛の場合、その初現期は墳形が方形であり築造地の立地条件や墳形（在来倭人墓は円墳で封土墳）などから渡来人と在来倭人の墓は明確に区別されていた。ところが、大室古墳群の場合、大半が円墳の積石塚であり上記諸地方の様相を当てはめた場合、円墳であることを除けば基本的にすべての古墳が渡来人の墳墓となる。むしろ在来倭人墓の存在が希少となる結果を生じる（大室古墳群では積石塚が古墳総数の大半を占めるだけではなく、古墳群形成時期中の比較的遅い6世紀中葉～後半になって封土墳が多く構築されることが知られている）。この原因について、筆者は西遠江や西毛には渡来人を監督し規制する勢力の存在が認められるのに対し、北信の場合そうした勢力の不在が考えられることをかねて主張している<sup>(41)</sup>。当該期はいわゆる「雄略朝」期に相当するが、該期は「中央」勢力主導による新技術の導入や支配体制の再構築など古墳時代における一大画期であったと推測される。このため、馬匹生産をはじめ製鉄（小鍛冶）や須恵器生産など新技術を持った渡来人を各地に配置して、生産にあたらせたものと考えられる。しかし「中央」の実体も未だ各地支配内容を強権で左右するまでには至らず、在地における渡来人の待遇や位相は各地域の主体性に任されていたのであろう。北信の場合、5世紀中葉の土口將軍塚古墳以後顕著な首長墳がなく、西毛等のような強い在地勢力が不在であった（在地首長の南信への移動説もあるが詳細は不明）。このため、明瞭な区別が認められないものと考えられる。

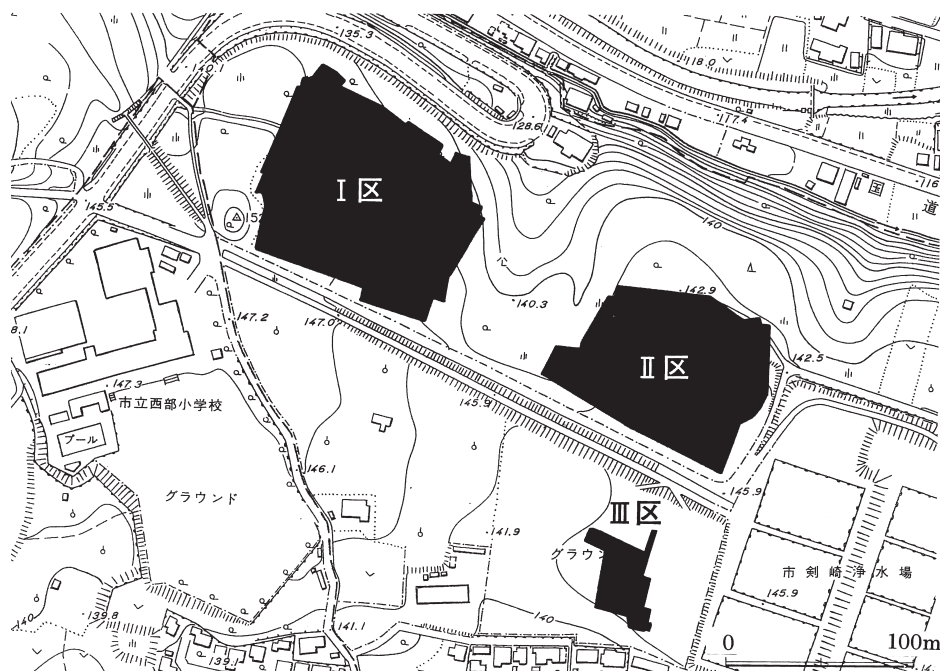
なお、これら各地域における積石塚の系譜であるが、5世紀後半は高句麗や百済の積石塚が消滅してすでに久しく（既述の通り、およそ5世紀前半までに消滅）、また出土する遺物は百済系の他に加耶に由来するものや新羅系のものも多く、多様である。中でも5世紀後半～6世紀にかけて、岩盤の多い地勢との関係からであろう洛東江中流域の加耶では積石塚が多く構築されていた（これらの古墳を韓国では特に「積石塚」とは呼称していない。おそらく、積石塚の呼称は意図的に積石して構築した古墳に限定して用い、地勢的条件によって構築された古墳とは区別して用いているものと思われる）。このように見るならば、一連の積石塚と洛東江流域の積石塚との関係性を否定することはできないであろう。ただし、一部では百済系の出土品も認められているので、こうした地域とも関連を有するに相違ない。

1で述べた総合的判断を述べるならば、これら地域では極めて早い段階（5世紀後半）での竈付住居や須恵器の普及、殺牛馬儀礼の実施、韓式土器の存在などをあげることができる。当該期は475年における百済の第一次滅亡と混乱によって百済をはじめ加耶諸地域等から多くの渡来人が列島へと流入した。また当該期は「雄略朝」にあたり、様々な改革と新技術導入に積極的であったため、在来倭人が欲する馬匹生産や製鉄技術を持った渡来人は相応の待遇を受けたであろう。現に群馬県では白井遺跡群など牧場が当該期から確認され（白井遺跡群はやや遅れて6世紀前





第6図 剣崎長瀬西古墳群（手前・積石塚、奥・封土墳）



第7図 剣崎長瀬西遺跡全体図

半～中葉に営まれている）、近年では製鉄遺跡（小鍛冶）も発見されつつある。こうして朝鮮半島と日本列島双方の事情から多くの渡来人が列島に移住し、東日本にも配置されたのである。もちろん、積石塚を構築しない渡来人も存在したであろう。伊那谷では多くの徴証から当該期に渡

来人が多く存在したにもかかわらず、積石塚は未発見である。積石塚は当該期に移住した渡来人の一部にとってその出自を示す象徴であったものと思われる。

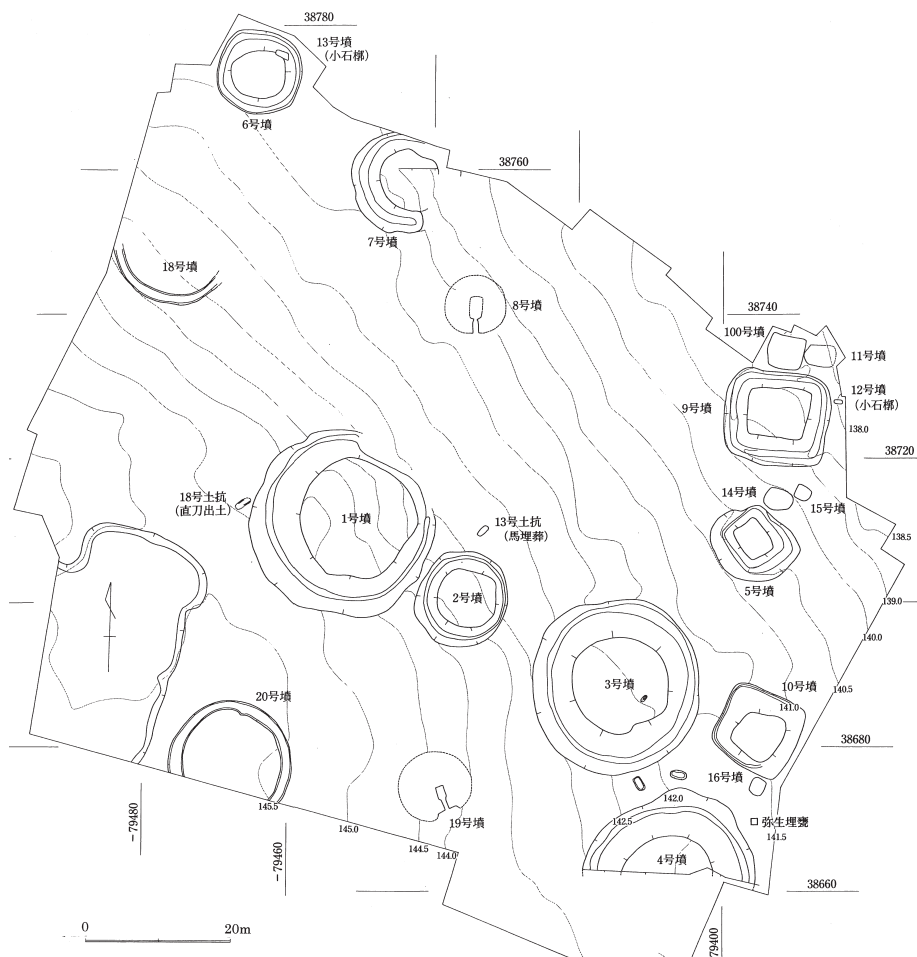
章を終るにあたり、群馬県高崎市剣崎長瀬西遺跡を例にとり1で述べた渡来人存在認定の手續きに従って、行論しておこう。本遺跡は遺物、遺構、儀礼のすべてにわたって渡来人存在の可能性を強く示唆する遺跡であると思われるからである<sup>(12)</sup>。

群馬県高崎市剣崎長瀬西遺跡は八幡台地の北端部にあり、小谷を挟んで墓地区のⅠ区（西側）と居住区のⅡ区（東側）にわかれる（第7図）。ただし、墳墓が築造される前のⅠ区にも住居は営まれており、墳墓地区となってからⅡ区に移動したようである。墳墓は5世紀後半にかかるものと6世紀後半～7世紀のものとの二類あるが、以下では5世紀後半の墳墓を対象とする。またⅡ区の竪穴住居は5世紀後半の墳墓と同時期であり、両者は有機的関係にある。

まずⅡ区の住居は造付竈の保有率が高く、韓式系土器も出土している（31軒中26軒が造付竈を備えていた。しかし、Ⅱ区住居の直前に営まれていたⅠ区では16軒中6軒が保有していたにすぎない。ただし、6軒の中には韓式系土器を出土した住居2軒が含まれている。後述する遺跡全体の様相とも併せ考えるなら、Ⅰ区に対しⅡ区の造付竈保有率が急上昇する事実は、集落では在来倭人と渡来人の双方が共生しており、渡来人のもたらした文化を倭人が選択的に採用した結果であることを示しているものと思われる）。また、特に韓式系土器の中には百済系と認められるものがある。これらは以下に述べる墳墓のうち、積石塚古墳被葬者の出自とも関連する重要な事実である。

次にⅠ区の墳墓について概観する（第6・8図）。Ⅰ区では封土墳8基と積石塚が8基調査された。このうち積石塚には二類あり、方墳と報告されているものと「積石塚」と報告されているものとがある。「積石塚」が竪穴式小石櫛を覆う程度に積石されているのに対し、方墳は5～10m程度の規模で方あるいは長方形を呈す。しかし、これは「積石塚」同様の構造の外側に、地山を掘り込んで周溝となし「積石塚」状の構造との間に全く盛土をしない犬走り状のテラスを設けたものであり、本質的には両者は何ら異ならないものとみてよい。このほか小石櫛のみのもの1基が認められた。この点については封土墳である円墳も基本的に方墳と同じ構造であることに留意しておきたい。

さて、上記の封土墳と積石塚は多くの要素から対称的である。まず一方が墳丘は盛土によるものであるのに対し、他は積石によること。また、墳形は封土墳が円墳であるのに対し、後者は方系である。さらに封土墳は埴輪をめぐるせているのに対し、積石塚では確認できない（積石塚の1基から埴輪が確認されたが、出土量がわずかで封土墳出土の埴輪とは異なった種類である。おそらく他所からの混入、あるいは持ち込みと思われ、本墳は基本的に埴輪は配置されなかったものとみてよいであろう）。その一方で、積石塚の中には韓式系土器や垂飾付耳飾一大加耶系かを副葬したものが見られた。さらに立地をみると、封土墳はⅠ区の西から南にかけての広い範囲を占地するのに対し、積石塚は東側でⅡ区との境界をなす小谷際の狭い範囲にかたまっている。以上から封土墳（円墳）を在来倭人墓、積石塚（方系墳）を渡来人の墳墓と考えて相違ないであろう。ただし、当地では6世紀以降積石塚や方系の小古墳は確認されておらず、両者の墳墓は封土墳（円墳）として同化したものと思われるのである。



第8図 剣崎長瀬西遺跡Ⅰ区の古墳分布図

以上の他に注目される事実として、馬埋葬土坑がある。これは円墳の1号・2号墳の側に位置するもので、洛東江中流域を故地とする馬具一轡一式一が着装されていた。いわゆる馬殉葬墓と思われ、殺馬儀礼を示すものであろう。ただし、積石塚ではなく封土墳の側で確認されたことの意味については、今後の課題とせざるを得ない。

以上を総合的に考察する場合、剣崎長瀬西遺跡では遺物（韓式系土器—百濟系のものが認められる—・垂飾付耳飾—大加耶系—・洛東江中流域—5世紀後半当時、親新羅地域であったと考えられる—に系譜を持つ馬具）、遺構（積石塚、竈付住居）、儀礼（殺馬儀礼）のすべてが渡来人存在の可能性を強く示しているのである。しかしその一方では、在来倭人との共生や徐々に両者が融合していったことなどが示されているのである。

#### 4 6世紀後半の渡来系遺物

以下では上毛野西部（西毛）の事例を取り上げる。当該期から7世紀初頭、西毛では新羅を中心とする半島系文物、特に威信財となる金銅製品が多く出土する。高崎市の綿貫観音山古墳（6世紀後半）<sup>(13)</sup>や同八幡観音塚古墳（7世紀初頭）<sup>(14)</sup>が代表的であるが、特に6世紀後半の特徴的な横穴式石室を共有する古墳が主体的であることから、綿貫観音山古墳の被葬者を盟主とする西毛地域における連合体を象徴する遺物ととらえることができる。特徴的な横穴式石室とは角閃石安山岩の削石積石室<sup>(15)</sup>のことであり、これを内部構造とする古墳からの出土が大半を占めており、規模や副葬品から綿貫観音山古墳が盟主であることは明らかである。また角閃石安山岩削石積石室の中でも、山王二子山（金冠塚）古墳から出土した、いわゆる出字形冠や、綿貫観音山古墳出土の数々の半島系遺物、中でも中国北朝（北魏に類似品がある）製と考えられる銅製水瓶や、他にも鉄製冑などは刮目に値する。筆者は以前これらの遺物を「新羅調」「任那調」に相当するものと推測した<sup>(16)</sup>。このことは1で指摘したように、威信財としての金銅製品であり、おそらく畿内王権からの再分配によるものと考えたのであった。上毛野の有力者は、663年における白村江戦時においても上毛野君稚子が6名いた將軍の一人として、他の畿内出身豪族とともに活躍している。当時の政治構造はすでに律令体制へと大きく舵を切っており、畿内出身豪族の優位は明瞭であった。その中において中央貴族化しつつあるとはいえ、本来地方出身豪族である上毛野氏が白村江戦時の將軍となっていることの意味は、軽視できるものではないであろう。したがって、その前史である6世紀後半、上毛野氏の地位は王権にとって極めて大きい存在であったと考えられるのである。こうした事をふまえて、畿内の王権が外交交渉の中で入手した新羅渡来の文物を、地方有力者（上毛野氏）に分与したものと考えたのである。既述の通り、角閃石安山岩削石積石室は綿貫観音山古墳を盟主とする西毛首長連合を象徴する埋葬主体であり、新来の渡来人を示唆するものではない。この点、渡来系文物の出土という同様の現象でありながら、5世紀後半の様相とは相当に異なることをふまえなければならない。おそらく畿内から入手した新羅渡来の威信財は、綿貫観音山古墳の被葬者によってさらに再分配されたものと考えられるのである。ただし、当該期に新たな渡来人が存在したことを否定するものでももちろんない。要は、単に渡来系文物が出土したという1点をもって渡来人の存否を議論するのではなく、そうした渡来系文物の示す詳細な情報や性格、またこれを取り囲む全体の様相、それが使用あるいは埋置された遺構等すべてを勘案して考察する必要があることを指摘して小稿を閉じたい。

#### 註

- （1） 亀田修一「考古学から見た渡来人」『古文化談叢』30（中）1993年。亀田はその後も陸続として渡来人問題を扱った論文を公表している。
- （2） 金鐘萬他編『艇止山』国立公州博物館・現代建設 1999年。
- （3） 吉原佳市他『根塚遺跡』木島平村教育委員会 2002年。
- （4） 風間栄一他「長野市浅川端遺跡出土の馬形帯鉤」『考古学雑誌』89巻2号 2005年。なお、註（5）論文掲載書において風間栄一による、馬形帯鉤に関する論考が掲載されている。風間栄一「馬形帯鉤の分類と系列



把握—日本出土の馬形帯鉤をめぐる—」。

- (5) 次の論考で、馬形帯鉤等の史的意義について考察した。土生田純之「日本出土馬形帯鉤の史的意義」『東アジア地域における青銅器文化の移入と変容および流通に関する多角的比較研究』国立歴史民俗博物館 2006年。
- (6) 野沢誠一「銅釧・鉄釧からみた弥生社会」『長野県立歴史館 研究紀要』8号 2002年。
- (7) 栗岩英治「大化前後の信濃と高句麗遺跡」『信濃』17巻5・6号 1938年、大場磐雄・桐原健「積石塚と群集墳」『古代の日本』6中部 角川書店 1970年。
- (8) 小林宇彦他『長野県史跡 『八丁鎧塚』—史跡整備に先立つ範囲確認調査報告書—』須坂市教育委員会 2000年。
- (9) 高田貫太『古墳時代の日朝関係—新羅・百済・大加耶と倭の交渉史—』吉川弘文館 2014年。なお、最近山本孝文は鎧塚2号墳出土の獣面帯金具の詳細な観察に基づいて、同出土品を鑄造による製品としたうえで、中心部と周縁部は別作りの上で結合し、最後に波状列点文を蹴彫によって装飾したと推定した。そして同種遺物のうちで初源期の資料であり、韓国公州水村里出土資料との製作面での共通性を確認している。従うべき見解である。山本孝文「初源期獅噛文帯金具にみる製作技術と文様の系統」『日本考古学』38号 2014年。
- (10) 林永珍「百済初期漢城時代古墳に関する研究」『韓國考古學報』30 1993年、吉井秀夫「百済の墳墓」『東アジアと日本の考古学Ⅰ』墓制① 同成社 2001年、林永珍「百済式積石塚の發生背景と意味」『韓國上古學報』57 2007年など。百済の積石塚については、特に林永珍が精力的に研究を行っており、上記以外にも文献は多い（林永珍の文献は、いずれもハングル版）。
- (11) 土生田純之「5世紀代東国の古墳文化—積石塚古墳を中心に—」『5世紀日本列島の古墳文化』韓国大東文化財研究院 2008年（同論文は次に再掲した『専修考古学』13号 2009年）他。
- (12) 黒田晃他『剣崎長瀬西遺跡Ⅰ』高崎市教育委員会 2002年、専修大学考古学研究室『剣崎長瀬西5・27・35号墳—剣崎長瀬西遺跡2—』2003年。
- (13) 徳江秀夫編『綿貫観音山古墳Ⅰ墳丘・埴輪編』群馬県教育委員会・（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団 1998年、徳江秀夫編『綿貫観音山古墳Ⅱ石室・遺物編』群馬県教育委員会・（財）群馬県埋蔵文化財調査事業団 1999年。
- (14) 高崎市教育委員会『八幡観音塚古墳調査報告書』1992年。
- (15) 右島和夫「截石切組積石室の研究」『東国古墳時代の研究』学生社 1994年。
- (16) 土生田純之「古墳時代後期における西毛（群馬県西部）の渡来系文物」『国立歴史民俗博物館研究報告』158 2010年。